



## 全農埼玉県本部運営委員会会長賞

# ふるさとを求めて

越谷市立武蔵野中学校 二年

恵後原 陸

ゆめびりか、ななつほし、あきたこまち、つや姫、新之助、天のつぶ、会津産コシヒカリ、青天の霹靂、雪若丸、だて正夢…。

これらは、この十年の間に我が家の食卓に並んだお米の銘柄の軌跡である。

東北の米どころ、福島県で生まれ育った僕の母は、とにかく米にうるさい。小さな頃からご飯と梅干しや漬け物など、いわゆるご飯のお供と呼ばれるものさえあれば食事は十分、というくらいご飯が大好きだった。あまりにもおかずを食べてくれないものだから、嫌がる母のご飯の上におかずを無理矢理乗せていただきました。食べさせていた、と祖母が笑いながら話してくれたことがあった。実際、祖母の家で食べるご飯はともおもしろい。特別すごい炊飯器で炊いているわけではないから、やはりお米自体がおもしろいのだろう。その証拠に東日本大震災が起こるまでは、祖母が送ってくれていた我が家のお米はともおもしろかった。当時三歳の僕の好物がおにぎりだったの言うまでもない。

だが、東日本大震災をきっかけに、そのお米は我が家に届かなくなってしまった。いつもお米を買っていた農家の方が米作りをやめてしまったのだ。仕方ないことだとはわかっているが、母の落ちこみようはひどかった。きつとその頃から我が家の米探し迷走が始まったのだろう。

この十年、様々なお米を食べてみたが、食感や味の違いはあれどどれもそれぞれおいしかったと思う。おいしかったのだ。でも、母だけは納得しなかった。同じ銘柄のお米をしばらくは買い続けるのだが、

「何かが違う。飽きちゃった。」

と言ってはすぐに次の銘柄のお米を試し始める。そして、次から次へと我が家のお米は変わっていった。

東北、またはその周辺の米であること。もっちり感と甘みがあること。柔らかすぎるのはダメ。粒がしっかりしていること。母が求めているお米はこんなところだろう。それはかつて食べていたあのお米の特徴とそっくりだ。そのお米と同じものを探している、といってもいいかもしれない。そのことに気がついたとき、僕は母にとってお米というのは、単なる主食ではなく、「ふるさと」そのものなのだということがわかってしまった。思えば、母はクリームボックスやいかにんじんなど、地元の味を大事にしている人だった。我が家のお雑煮は福島のものだ。毎日食べるお米だからこそ、そのこだわりも強いのだろう。地元を離れてしまったから余計に「ふるさと」の味を忘れたくないのかもしれない。

今現在、我が家の食卓にあがっているお米は、宮城県産の「だて正夢」という品種だ。平成三十年に本格デビューした絶妙な粘りが生むとびきりのもっちり感が特長のお米だ。どうやら母のお眼鏡にかなったようで、ここ二年程はこのお米に落ち着いている。また飽きたり、納得しきれなくて迷走の日々に戻ってしまうかもしれない。でも、僕としては、おいしいお米が色々食べられることに何の不満もないため、母の「ふるさと探し」にはとことんつき合っていると思っている。そして、一日でも早く母が心から満足できる「ふるさと」が見つかることを心から願っている。でも、そんなことを思っているなんて、かなり照れ臭いからこれは母には絶対に秘密だ。

そして、僕たち家族は今日も嬉しそうにご飯をほおぼる母を見ながら、同じく笑顔でご飯をほおぼっている。